

Title	The Return of the Native に於ける葛藤について
Author(s)	藤田, 繁
Citation	Osaka Literary Review. 1 P.44-P.56
Issue Date	1962-04-01
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25830
DOI	10.18910/25830
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

The Return of the Native に於ける葛藤について

藤 田 繁

1878年に発表された *The Return of the Native* は、言うまでもなく、Wessex Novels 中最傑作の一つであり、殊にその整った構成は類をみず、数多くの学者によって研究されて来た。以下の小論では、葛藤の考察を通して、この作品の主題に迫りたいと思う。

I

先ず、人物間の葛藤という観点から作品を逐時みてゆけば、次のようになる。

Book I では、安定した Wildevve と Thomasin の関係が結婚中止によって、不安定をつくり出し、それを Mrs. Yeobright が確定的なものへと追いやる。軽薄な Wildevve は直ちに Eustacia に誘惑され、惹かれるが、Venn と Mrs. Yeobright の作用で、Eustacia は Wildevve を嫌うことになる。Thomasin の不安定で始まった物語がこの巻末では Eustacia の不安定に重点が切り換えられ、新しい空白が出来上っている。この空白は何か刺戟があれば、即座に充たされるものであり、次の男性側の主人公 Clym のこの葛藤への参加を容易、且つ必然的にしているわけである。かくて、Book II では、Eustacia と Clym の劇へと展開してゆく。

Wildevve に見切りをつけた Eustacia は Clym に接近してゆく。一方 Wildevve の方は、Eustacia に捨てられ、反動的に Thomasin との結婚へと踏切る。Venn は Wildevve に刺戟され、Thomasin の方へ具体的に働きかけようとする。どの動きも有機的であり、clichè をつかえば、くもの

巢が一部を動かされれば全体が揺れるように、各自必然的な方向へと運動している。この辺り、人物配置の力学に一分の誤りもない。更に Hardy の巧妙な所は、Thomasin と Wildevé の結婚によって安定させるどころか、人物間の運動の potentiality をそのままにしておいて、複雑性をとり入れたということである。Wildevé は Thomasin に満足するような男ではない。本質的に異質のこの 2 人の男女を結婚させることによって得た Hardy の利得は少くない。外面的には、Eustacia が Clym と結ばれるのを必然としたことであり、もう一つ見逃せないのは、Wildevé に夫婦間の moral というブレーキをつけて動かせるという、複雑性を獲得出来たことであろう。

Book III では、今や遊離した Eustacia は必然的に Clym の方へ傾く。彼女の作用を受けて、Clym の方も彼女の方に傾く。この互いの接近を早め、強めるのは、Eustacia 側からみれば、彼女の Egdon Heath への憎しみと Paris への憧れであり、Clym 側からみれば、Mrs. Yeobright のこの結婚に対する猛烈な反対である。他方 Wildevé は、もともと愛情が基の結婚ではないので、Thomasin から離れて Eustacia の方に行動する萌しをみせている。この Wildevé の動きに対し、Thomasin を unselfish に愛する Venn が、その夫の運動をセーブしようと活動を始めてくる。しかも、Clym と Eustacia も真に相互理解の上で結婚に入ったのではないから、錯綜する人間関係の不安定は局面をかえただけで、依然不安定のままである。否、むしろ一応外面上安定に達したかにみえるが故に、その不安定は深く、大きいものとなり、次の不幸を惹起するに十分なエネルギーが貯えられることになる。

Book IV では、結婚当初の夢に破れた Eustacia は Clym より後退してゆく。異質の 2 人を結婚させた Hardy の真意はここにあろう。Eustacia を Clym から後退させる力は、皮肉にも、彼女を彼にひきつけた Egdon Heath への憎しみと都会への憧れが根本的なもので、その契機としては

Mrs. Yeobright との争いがある。最早 Clym は彼女の夢をかなえてくれる力もなく意志もない。そこでこの運命に反逆してダンスにゆき、Wildevé に再び近づく。Wildevé への接近を加速するのは、彼に転がり込んだ、彼女をParisにつれてゆくのを可能にする11,000ポンドの遺産である。一方 Venn は、Wildevé があの月夜のダンス以来、再び Eustacia に熱をあげているので、Thomasin の為に奮闘する。所が、彼が善意からうつ手段の全てが反対の結果となって現われる。Clym, Eustacia 間の疎遠、Wildevé の Eustacia への接近、Thomasin を媒介としての Venn の活動、Mrs. Yeobright の和解の努力、Eustacia の拒否と、次々に連鎖反応を起し、Clym と Eustacia を中心として出来た見せかけの安定は僅か2カ月に崩れさり、Mrs. Yeobright の生命を呑み込んだ次第である。しかも、Clym—Eustacia—Wildevé—Thomasin—Venn の葛藤は未だ解消したわけではなく、Mrs. Yeobright の死の決済もすんでいない。夫人の死が起爆剤となって、更に大がかりな爆発が誘発される余地が十分残されているわけである。この夫人の死の意義は Book V で明瞭になる。

Eustacia をこれまでと違った画期的な行為にかりたてるには、即ち Egdon Heath からみずから飛び出るように仕向けるには、一番有効な手段として夫 Clym との関係を断つことがあろう。所が Clym は深く Eustacia を愛している。それ故、そのままでは彼等の間に Eustacia がどう振舞おうと破綻は生じない。この強い結合を破壊するにはそれ相当のエネルギーが要る。それが Mrs. Yeobright の死であったのである。彼女になれば、Clym は Eustacia に対するのと同じ程の愛情とすまないという気持を持っている。その死が Eustacia の為にもたらされたとなると、たとえ一時的にしる必ず彼らの結合を切断する力をもつことになる。かくて彼等は別れ、窮地に追い込まれた Eustacia は彼女の精神的エネルギーを専ら Heath を逃れることに指し向ける。しかも Wildevé という11,000ポンドの協力者がある。しかし、その決行に際して挫折する。一は自然の猛威の

為、一は金を忘れたという偶然の為、かつ又一は持ち前の自尊心の故に。Wildevve の金を拒んだ彼女の自尊心は彼女を自殺へと追いやるが、或はこれは女神の素材と云われた彼女らしい死に方かもしれない。自ら命を断つことによって自らを他の支配より全く解放したのであるから。さて、この葛藤の5つの要素の内、かなめとなる2つが没し去った今、Clym が Thomasin を愛し、Thomasin が彼と Venn のどちらにも心を許すことがなければ、葛藤は生じ得ない。3つの生命の消去により、葛藤は解消し、我々にいわゆるカタルシスをもたらすのであるが、Hardy は更に 'After-courses' と称して、Book VI を書いた。Eustacia と Wildevve を欠いた人間関係は、後動くとするれば、Thomasin の気の向く方向にしかあり得ない。そこで彼女は終始自分を慕ってくれた Venn に心動かされ、結婚する。残された Clym は説教者として一生を送る。この巻を附足したことは、*The Native* の為に惜しまれる。作者も後味の悪いものを感じているらしいのは、p. 470 の脚註によってもわかるが、彼の Venn の取扱い方にみられる変化にも看取される。Venn に対するこれまでの好意的な態度は俗物に対する一種の嫌悪或は皮肉になっている。Venn の俗化と happy ending は悲劇を突然喜劇に変えてしまい、折角獲得したカタルシス的な効果を台無しにしてしまうが故に、極力避けるべきではなかったか。今後の葛藤の考察ではこの巻を省略することにした。

さて、それでは以上の間葛藤を可能にしたのはどういう条件であるか。先ず第一に挙げねばならぬものは人物設定とその配置である。Eustacia 対 Thomasin, Wildevve 対 Venn と2組の対照的な男女を設定すると共に、加えて、Clym と Mrs. Yeobright という強力な意志の持主がある。この内 Eustacia と Wildevve は Egdon Heath を憎み、そこから出ようともがいており、他の4人は、Mrs. Yeobright はやゝ例外的としても、Egdon Heath を愛するものである。Hardy は利害関係が一致する筈の Eustacia と Wildevve とは結びつけず、それぞれにはぼ正反対の Clym と Thomasin

を妻合わせた。この組合せでは、水と油のように、離反ないし反発せざるを得ない。この彼らの運動は彼等の周辺に附着する Venn と Mrs. Yeobright を当然静止するがままにはしておかない。形式の上でも、この小説を5人の人物で始め、後に Clym が加わり、Mrs. Yeobright, Eustacia, Wildeve と消えてゆく様式は、劇的葛藤に適している。これについては、Edwin Muir: *The Structure of the Novel* (The Hogarth Press, 1960) p. 60 を参照されたい。

しかし、これだけで6人の人物を反目にしろ、同和にしろ結びつけておくに十分ではない。ここに場の統一という問題が出て来る。The Native には明らかにそれがみられる。冒頭の Egdon Heath の描写に、‘Overhead the hollow stretch of whitish cloud shutting out the sky was as a tent which had the whole heath for its floor’ という個所がある。6人の人間ドラマはこの範囲内で行われ、そこから出る時は、丁度ギリシャ悲劇におけるように、使者に当る人間が伝達したり、そこにたまたま居合わせた人物が噂として村人に話したりするのみで、遂にこの空のテントと Heath の床の中から出ることはないのである。この効果は明白である。閉じ込められている場所が狭ければ狭い程、又、そこに閉じ込められている人間が多ければ多い程、それだけ頻繁に濃密な人間ドラマがそこに展開されるであろうし、且つ又、閉じ込められているが故に、そのドラマはその範囲内に限られてしまう。その結果、作者は読者に顕微鏡下の人間劇を示すことが出来るのである。その上、Hardy が唯一の場面に設定した Heath は今云ったような消極的役割を果すにとどまらぬ。その積極的な面は後程又触れたいと思う。

これだけの条件ではまだ、The Native の人間葛藤の迫力を説明することは出来ない。「より多く凝集させた効果は、時が長く引き伸ばされて、稀薄になった効果よりも、より大なる喜びを与える」とは「詩学」の言葉である。これと同じことが The Native にも云えるのである。ギリシャ悲

劇では通常1日とその長さであったが、この小説ではそれがほぼ正確に1年、即ち11月5日薄暮に始まり、次の年の11月6日夜に幕が閉じるのである。この僅か1年の間に6人の人生が徹底的に変貌し、その中3人が死んでゆくのであれば、緊密感のない方が不思議であろう。

しかも、以上の条件では尚、あの人間ドラマは進行しなかったであろう。その展開の小さな転機となったものを振返れば、他にどのようなものが働いていたかすぐわかる。いわゆる偶然があの人間葛藤を更に複雑にし、その方向を決定したのであった。

このようにして、この小説はアリストテレスの満足するように結末へと急ぐのであるが、同時に、葛藤の糸乱れぬ緊密さを重んじるあまり、Hardyが犠牲にしたものも看過することは出来ない。E. M. ForsterはWessex Novelsについて、その著*Aspects of the Novel* (Arnold, 1958)でかなり長く論評している (pp. 89-91)。Plotが勝ちすぎて、人物が生きていないというのはやはり当をえた批評である。Eustaciaにしろ、Clymにしろ、一人きりでいるときは全く精彩がない。D. H. Lawrenceが‘Thus both Eustacia and he (=Clym) sidetrack from themselves, and each leaves the other unconvinced, unsatisfied, unrealized’ と云っているように、彼らは自己本来の生き方を真に求めることは決してない。Wildeveも‘attracted always from outside and never driven within’であって、常に外界の事情、事件に、即ちHardyの設定したplotに従い、浮遊するだけである。Thomasinに至っては自分の意志があるのかないのか疑わしい。Mrs. Yeobrightにしても、同じくLawrenceの言葉を借りれば、‘one of the old, rigid pillars of the system’であって、人間になるのは時々母性愛を示すとき位のものである。Vennについては多くの人々が賞讃を送り、成程一面では魅力ある性格をしてはいるけれども、これも見方を変えればplotの所産かと思われる。reddleを売って回る彼の家は馬車であり、他の5人と違って自由に移動出来る。それで、丁度 Shake-

speare が Iago の行動範囲を Roderigo によって大巾に広げることが出来たように、Hardy も人物葛藤をこの Venn によって十分に広げ、かつ調節出来たに違いない。というよりは、その為にもどうしても作らざるを得なかった人物ではあるまいか。この事から、彼の駆引にみられる sophisticated な面と Thomasin への恋慕にみられる simple な面との矛盾も説明されるであろう。更には又、Book I の前提として、Wildevve と Thomasin が結婚することになっていたのも、後の彼らの行動から類推して、想像の出来ない所である。

しかしながら、*The Native* では plot が勝ちすぎて人物を殺している、と述べたけれど、他方からみれば、この犠牲のお蔭で作品全体の均衡が保たれ、葛藤の最中にある作中人物が衝突するとき、強烈なエネルギーを発散することが出来たのであった。例えば、Mrs. Yeobright と Eustacia が口論する所など、すさまじい火花が飛び散るのである。又、作品全体についても、不合理な Wildevve と Thomasin の結婚中止から始まって、Book I, Book II とだらしなく続く人物関係は、Book III の Clym と Eustacia の結婚あたりから生気を帯び出し、Book IV の Mrs. Yeobright の死となって先ず前半貯えたエネルギーを発散し、夫人の死は、更に強い爆発をひき起す不安定を残し、遂に全エネルギーを費して catastrophe になだれ込むのである。この Book IV から Book V まで息もつがせぬ迫力は強力な plot の結果に他ならない。Edwin Muir は同じ *The Native* を挙げて、その迫力を時間感覚に切り換え、巧みに説明している (*The Structure of the Novel*, p. 72)。

II

これまで作中人物間の葛藤について述べたが、この作品の葛藤は人間に止まるものではない。即ち Nature と作中人物との葛藤が見出されるのである。先の考察と、この解明をまって始めてこの作品の本質が姿を現

わすであらう。

Nature と人物間の葛藤と云ったが、更にはっきり云えば、Egdon Heath と Eustacia 間に於ける葛藤である。葛藤と云えば、何らかの敵対関係がなくてはならず、Egdon Heath は元来この点ではゼロの立場である。だが、それは Clym や Venn にとっては味方となり、Eustacia や Wildeve にとっては敵となるのであり、その点からみると、この小説は Eustacia と Heath との葛藤の物語ということになる。そういう方面からこの作品を少し考えてみたい。

この作品には、冒頭の Egdon Heath 描写を始めとして、全篇に絶えず自然描写がちりばめてある。その Nature 描写の働きの主なものは、Nature そのものの美を伝えるもの、作中人物の気持をその視点を通して自然描写することによって表現するもの、及び Hardy の哲学を表わすものなどであらう。その中で最も重要な主調音をなすものは最後に挙げたもので、これこそ Eustacia と敵対関係に立つものである。その調子がどのようなものであるかは、冒頭の Egdon Heath 描写を読めば如実に感じられよう。それは Hardy の所謂 Immanent Will の具現と云って差支えないであらう。山形大学の工藤亀三郎教授の言葉をお借りすれば、「無情な超然たる力——盲目的な力——Eustacia Vye を嘆かしめ、世の中をままならぬものたらしめる力——それが Hardy の観じた自然、即ち宇宙のいだいている盲目的な意思であった」のである（大沢衛編「ハーディ研究」英宝社、pp. 136-7）。又、同じ Egdon Heath について、D. H. Lawrence がさすかに本質を衝いた論評を行なっている（D. H. Lawrence: *Selected literary criticism*, Heinemann, 1961, pp. 172-3）。

この Egdon Heath に対して、Eustacia はどのような女であったかは、Book I, VII, 'Queen of Night' に詳しく描かれている。The untameable, Ishmaelitic thing である Egdon Heath が、the raw material of a divinity の Eustacia に合う筈がない。かくて彼女は Egdon を憎み、

それに反抗するのである。反抗に対しては Egdon は冷たい復讐でもって応える。結局 Eustacia は滅びざるわけである。Eustacia の Egdon Heath への憎しみを Hardy は恐らく意識的にしばしば作品中で繰返している (p. 116, p. 205, p. 220, etc.). このような例は他にも多く見られ、遂に414ページでは、Eustacia は Egdon Heath を普遍的世界に感じるに至っている：‘She had used to think of the heath alone as an uncongenial spot to be in; she felt it now of the whole world.’ そのような世界に自分が居るのも Fate であると考えるのは当然で、しばしば彼女の口から Fate とか、Destiny とか、Heaven などという言葉が出て来ることになる。この辺りの事情は Abercrombie がその著書 *Thomas Hardy* (Martin Secker, 1924) pp. 79-80 で適切に述べている。

次に Eustacia と Egdon Heath 間の葛藤という面より story を通観してみる。Book I では、Eustacia は Wildeve を自分のものにする事が出来たし、Wildeve はアメリカに行こうと云っているのであるから、この Egdon Heath からの脱出は相当の可能性があった。所がその巻の終わりでは、Wildeve が Thomasin に捨てられたと思い、持ち前の自尊心から彼を捨てる。ここで又振出しに戻るのであるが、Paris から帰郷した Clym に便乗して憧れのパリに行けるやもしれぬと夢をはせているのが Book II である。次いで Book III では、Clym と恋愛関係に入り、遂に結婚する。この時が彼女の運勢の頂点で、Clym が Paris に帰らないと知ると共に、運勢は下降を辿る。Mrs. Yeobright の死の辺りまで下降を続けるが、その頃になると Wildeve に11,000ポンドの遺産が入り、彼が彼女に心を寄せていることが判って来て、彼女のHeathから脱れ出る希望は又ふくらみ始め、従って運勢線はやや上昇し、終りまで除々に昇り坂である。所がここで又も邪魔が入る。一つは自然の猛威、他は彼女の自尊心である。最後は自殺で、常識的見方をすれば、急転直下の下降運勢を示す。そして自然が猛々しくその勝利の歌をうたうのである。これをNature 側からみれ

ば、丁度 Beethoven の No. 5 とよく似た構造を示している。Book I の劈頭で、莊重崇高に Nature が leit-motif を、即ち運命と云ったものを奏る。この第一動機は作品中絶えず、或は高く或は低く聞こえている。その間、人間ドラマも進行していて、人間が運命に敗れると思われる個所で、Nature は無気味に己れの主調音を響かせるのである。例えば Mrs. Yeobright が Clym 家近くの丘に休んでいる時見る光景がそれである (p. 327)。彼女の死後、Eustacia がいよいよ Egdon から逃れようと試みる時も、Nature はその不吉な、恐ろしい姿を現わす (pp. 418-9)。そのとき、今は精魂つき果てた Eustacia が叫ぶ言葉も注意されたい (p. 420)。このようにして自然は、或は運命と云った方がいいかもしれないが、ささやかな一個の反抗を冷酷に蹂躪し去ったのである。

III

これまで2種の葛藤を概観した。次に結論に入りたい。

人物からみれば、この作品の主人公は Eustacia である。しかし、Nature と Eustacia との葛藤について考えたとき、Egdon Heath の役割の重要性もみた。現に D. H. Lawrence はこの悲劇の本質は Egdon Heath だと云ってゐる。それでは主人公は Heath を代表とする Nature であるか、と云えば、それも妥当ではない。人物関係の葛藤描写が実際問題として作品の大半を占めておれば、Nature 偏重もうなずけない。結局この作品は2重の構造をもっていて、2つの主人公をもつということになる。即ち、人間と Heath と。それでは、この作品のテーマは何であるかという疑問が当然出て来る。Percy Lubbock は a phrase で云えないなら、小説の主題として適していないと云っている。そこで、*The Native* の主題を一語で云えば何であるか考えてみたい。先ず Eustacia からみて、彼女をめぐる恋愛物語であろうか。成程作品中で、主役6人中 Mrs. Yeobright を除けば、全て恋愛のようなことをしている。けれども、所作事だけで、

恋愛そのものは殆んど描かれていない。Eustacia は Paris に対してならともかく、人間には恋愛はしていないと云っていい位である。では ego と ego のぶつかりあいを描いたのであるか、これも違う。Lawrence が云ったように、彼らは本来の自分になろうとはしていたが、それを意識してはいなかった。真に自分の ego を追究することは一度すらない。では Egdon Heath であるか。そのもっているある力、何かの代行者としてのそれを考えるとき、可成妥当な答えとなって来るであろう。Shakespeare に例を借りれば、作者は *Julius Caesar* で Brutus や Antony や Octavius Caesar を描こうとしたのではないようである。真にねらったのはやはり Julius Caesar であったと思われる (cf. 鷲山第三郎:「悲劇と神の問題」 pp. 75-77)。作品の前半で殺された筈の彼が、隠れた主人公として、話が進展すると共に巨大な力をふるい、Casio と Brutus は次々に滅んでゆく。それを 2 人とも Antony や Octavius のせいだとは思っていない。それ故 2 人とも死の直前に叫ぶのは Julius Caesar の名前である (*Julius Caesar* V. iii. ll. 45-6, V. v. ll. 50-1)。The *Native* に於ても、意識するしないに拘らず、Hardy がねらったのは、Eustacia とか Egdon Heath そのものではなくて、Eustacia を始め人間達を含めて万物を支配しているもの、Egdon Heath が時に代行する、その代行されたものではなかったか。人物葛藤が加速度的に破局にもつれ込み、それに自然が凄惨な迫力を加えていたとき、Eustacia は己れの敗北を知る。そして叫ぶ言葉は、
 “O, how hard it is of Heaven to devise such tortures for me, who have done no harm to Heaven at all!” であった。これが彼女のこの世の最後の言葉でもあれば、この作品の真の主人公、主題は Hardy のいわゆる The Immanent Will と考えざるを得ない。こう考えてくると、先の E. M. Forster の Hardy 評は真に的を得ているといえる。唯、彼は人物を主眼点におき、その reality を第一においた。勿論そういう見方はそれで正しいが、しかし、Hardy のテーマが The Immanent Will という

humanity を備えないものとみたとき、又新たな考察もなされ得る。Forster は ‘he (=Hardy) has emphasized causality more strongly than his medium permits’ と云ったが、今度は人物ではなくこの causality を主体にするに適した medium を考えることは出来まいか。Hardy が Immanent Will に従って plot を捏ればねる程、肝心の Immanent Will は後退し、Hardy その人が人物をあやつっているのが見えた。又、作品中、人物の葛藤を錯綜させ、人間を不幸にしていた偶然が多ければ多い程、それに対する怒りを読者は Immanent Will に投げかけず、Hardy その人に煩らわしさとして感じたのである。この Hardy という作者をとり除いて、作品から Immanent Will へ読者を直結させる方法はなかったものであろうか。その解決は視点にあるようである。Hardy は概して高みから見下していた作家である。そこでその視点をいっそのこと更に高く上げて、天上界に托せばどうであったか。そうすれば、作者は姿を消して、作品はそれ自体で独立し、且つ Immanent Will そのものを読者に提示しえたのではなかったか。Hardy はこれを *The Dynasts* に於て実行し、Immanent Will を見事に表現し得たのであった。Forster は Wessex novels について、‘They are to be tragedies or tragi-comedies’ といっている。このようなことは小説という形態では不可能なのかもしれない。しかしながら尚、Lubbock 流に云えば、ひょっとすると、彼が自分のテーマをもっと明確に把握し、もっと方法を熟考しておれば、*The Return of the Native* は更に優れた小説になっていたかもしれない、とは云えるであろう。

以上、葛藤の考察を通して、*The Return of the Native* のテーマが Immanent Will であり、*The Dynasts* への一過程であるという結論に達した。まことにありふれた、わかり切った結論である。だが Hardy の研究はここから始まるのであろう。Immanent Will とは何か、*The Native* が小説の白眉として我々に与える感銘は何であるか、等については稿を改

めたい。

〔註〕 *The Return of the Native* からの引用ページ数は、1954年 Macmillan & Co., Ltd. 刊のPocket Edition に依った。